

かの置時計はもと以前の取締某の所有物であつた。處が某はふと肺病を病み、自然業務も怠り勝となつたので、平素からその位置をねらうてゐた澤田は得たり賢しと、種々運動のする、終に取締役を奪ふたのである。で某はいたく澤田を恨み、死する時紀念の爲と稱して常々愛玩せる置時計を贈り、そのまゝ黄泉の客となつた。その怨靈が時計に宿つてゐて、終にその怨みを晴らしたのであるといふことである。

弘法百奇蹟

大和岡田竹雲

◎其五十一、護摩窟
只護摩を修したと云ふだけならば、所々にあることだから、奇蹟ともする値はないが、これは大和國宇陀郡室生山に残つてあるので、奇蹟の其四十四、つくね岩として紹介した岩の少し下の方で右へまがつたところに在る、細い道が其下に通つてあつて、護摩窟の下に行けるが、一丈一二尺上に在るから、窟の中は如何なるものなるか、わからぬ。案内してくれた快活な和尚の云ふには、この窟の中には

今でも、護摩の灰が落ちてあるとのことだから、好奇心がムラムラと起つた、そこで、兀然と聳えたる巖壁加之、上部は前に出たる、巨岩の穴に向つて攀づかけ登つて護摩窟に入つた。しかし、和尚は頻りに止めなければ、岩角をつかみ一丈餘

然たるときは登れるが、降りるときは恐ろしいから誰も入れぬと云つて居た、なるほど窟から今登つた一丈あまりの岩を見下せば、こは如何に千仞の絶壁、實に懼畏である！

◎其五十二、二十日大師
良鐵道の京終驛（奈良より南方の人等の下車すべき驛）で（汽車と別れ、真直に北行し、木辻、鳴川と云ふ遊摩を通じ抜けると、道の左手に小さな門がある、それである。

三條なる奈良停車場から來るには、目貫とも云はる、



本阿彌光悅の墓

浪華西村無藥

橋本町の通りを南に向つて、ズン／＼進んだならば高御門といふ町があつて、其南端である。弘法大師自作の像であつて、本橋本町善法堂の住僧慶尊法師の師匠は、山城國笠置村に住してなか／＼道徳堅固の善智識であつたが、笠置村の人等が、此像を贈つたので、橋本町の四室辻に建立されたから慶尊法師が、こゝに移したのだと縁起である。さて奇らしいのは、長二尺五寸位の坐像で裸體である。はだか大師と云ふが、正當であるが、國音相似したる處から二十日大師と呼んで、毎月の縁日も二十日にすることとなつて居る、して年に一回免着衣の取代を行ふが（三月二十日）襟裏が汚れてあるのと法衣の裾の弱つてあるのとは、これ亦妙だと住僧が話して居た。

京都鐵道二條驛を下車し、所謂若狭街道なる千本通りを一直線に北行すれば、地勢漸く高く、淨刹の相連なるあり、即ち此邊を蓮臺野と稱し、古の仇の原なり、茲處を過ぎて進むこと數町にして一の販路あり、地閑に翠碧滴たるの景又た捨べからず、東都門の市街を望み、大德寺の樹林近く通り、船丘の靈祠樹間に顯はれ、衣笠の峰後に時ゆるは實に奇勝と稱すべし、此の清淑の氣鍾まるの所に一梵宇あり、太虛庵と云ふ能を以て、今に慕はる、本阿彌光悅の墳墓なりき、彼號を德友齋又た大虛庵と稱し、或ひは鷺峰舍と云ふ書法一家をなして妙手の譽れ高く、當時世に三筆の一

と稱せらる、所謂近衛龍山公、龍本猩々翁及び光悦を指させるなり、又た書を能くし風致一家をなし、茶道に堪能にして、書は永徳に茶は古田織部を師とし、最も刀劍の鑑定に長ず、居を茲地に占め、寛永十四年二月三日に没す、享年八十一、法諡して太虛庵光悦と云ふ、其子光甫又書法を父に受けて之れを能し、空中齋と號し、茶法に詳しく、陶器を製するに妙を得たり後ち法眼に叙す、天和二年七月廿四日に歿す、年八十ニ、墓は父と相ひ並べり、尚此寺には名所司代たる板倉伊賀守、同内膳正等の墳墓あり。

阿蘇惟直兄弟の墓

牟田口又吉

忠誠なる南朝の臣にして菊池武俊と力を合せて足利尊氏と筑前國多々良濱に於て決戦し、戦遂に利あらずして各地に轉戦し、又阿蘇大宮司惟直は肥前國東松浦郡と小城郡の境なる天山の頂上にて阿蘇山の煙を望みて戦死す、其墓今尚頂上にあり、無數の礫は墓邊に群集して恰も衛護の兵の如し、墓形は高さ三尺に足らず、輪

和訓葉勿玉考等は、有名なもので有る。安永年中に、淡齋が、右の日本書記通證和訓葉勿玉考等の、稿冊若干を、石櫃に藏め、不朽に貽さんものと右同所古世古神社の境内に埋め、一碑を建て、反古塚と題したのが、今尙ほ、現存してゐるので有る、碑は自然石で、二段にたゝまれた、其上に、表面反古塚の三字を刻し、裏面には、和歌一首誌されて有るけれども、昔まみれで讀難い、高さ二尺六寸餘の、自然石が置かれてゐるので有る、其人々が皆、之を奇とし、反古を埋めた當時、玉虫が、三日間も聯接して出たので人々が皆、之を奇とし、漢詩、和歌等を送つた者も多かつた、内に須賀直見と云へる人の谷川淡齋ころ、書あつめたる物ともをうづみて、反古塚と名づけたりけるに、その塚に玉虫といふ虫をかすくいでありけるをいとめづらしき事とて人々がよみて、をくりけるにわれも、よみてをくる。世に高き名はうづもれぬ書塚に



停車場所
一

光みせんといでし玉ひし。

と。云ふのも有つた。
こゝに、一奇談とも云ふべき、逸話がある。それは、淡齋の、八町なる其寓居へ、一夕、近村の農夫で有る

と云つて、吾小兒の病氣を速に見舞にあづかりたいと、輿を供なうて來たので、淡齋は、それを心善く諾して、輿に乗せられて、半里許も経來た頃、輿を玄關へ横附にして、住家は此處で有から、下て被下と云事で有るので、淡齋は下りて、なにげなく、邊りを見廻すと、中々門構への立派な大家で有るのに驚かされつゝ、案内に連れ家内に導かれ、病も、投薬して、又輿に送られて、歸宅つてから、門生に曰のには、我も醫者を永年く業つて居るに、人に診断たのも又多數のことであるが、異な事で有るはい、今夕赴つて診断た、病者の脈は人種と異なるて居る、余は、

淡齋姓は、谷川名は士清、淡齋は、其號で有る。本居宣長翁の高足で、夙に力を國學に盡した人で、寛永己丑を業とし、淡齋に至つて、家名は益振ひ、遠近門に乞ふ者、頗る多かつた。淡齋は、安永丙申十月十日に死亡した。墓所は、伊勢國安濃郡御町大字刑部の、福藏寺内に、有つて高は二尺餘の花崗石で、表面に題して、淡齋谷川士清之墓として有る、而して、其著はす所の書の、日本書記通證

谷川淡齋の墓

伊勢衛藤寒舟

じ重の塔なり、後明治の照代に至り小城公園の碑を立て有栖川宮御直筆にて其序を書かれけり其弟尚殘して東松浦郡、瀧川村兒童崖に匿れ居り、同村柳瀬村の士小形氏に助けられて南村に一家を立つ、性を舊都隈本と呼び其後裔今尚其性を守る、其墓は隈本氏墓地にあり後に其靈を祀りて若宮大明神と崇めて村人氏神とす阿蘇は抑も平家にして桓武天皇の後裔なり